

# オプション教材ティカカズラ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。  
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）  
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

3.

4.

5.

「ゆうれい電車あ。」

「ゆうれいっ。」

「えーっ、何よ、それ。」

ぼくらは、「ゆうれい電車」ということばそのものに、こうふんして、しまった。

「ぼくひとりでき、九回ためしてみて、九回とも同じようなことが起こった。それで、どうしてもみんなに、たしかめてほしかったんだよ。」

ぶると君だけがおちついて、説明せつめいしている。

「くらいところから写真を取り出すのが、早いかおそいかで、中の電車は、横を向いたところだったり、しつぽのほうだけだったり、もう走りすぎていて、まったく写っていなかったりするんだ。明るいところでは、写真はずーっと変わからない。」

「あらやだ。わたしの耳のあなつて、きゆうにふさがつちやつたのかしら。ぶると君の言っていることが、のうみそまで、ちつともどいてこないわ。」

はら子が、自分の耳をほじってみせた。

「いやはや、はいいや、おれの頭ん中は、もう大こんらん、ぜんぶ赤信号あかしんごうだぜ。」

にせご君がためいきまじりにいった。ぼくも、のうみそがごろのかたまりになつたような気分だった。「ざざざあーっ。」という外の夕立の音が、じかに頭の中にまでひびいてきて、のうみそまで流されそうだった。

「ぶると君の言うとおり、写真の中で電車が動いたんだとしてさ、それじゃ、この写真はいつたいぜんたい、だれが写したの。ぶると君、きみが写した？」

はら子がぶると君に人さし指をつきつけた。

「ぼくじゃないよ。この写真は兄きのへやにあつたのを、だまつて持ち出したものなんだ。兄きか、兄きの友だちが写したんじゃないかな。まだ兄きには聞かないでいるんだけど。」

「そう。それじゃ、あなたの兄さんにじかに聞いたほうがつとり早いわけだけど、写真がほんものなら、その元には、ほんもののゆうれい電車があるってわけでしょ。つまり、ほんものの「ゆうれい電車」がさ。」

はら子が、みんなの気にかかつていたことを、ずばり口に出していった。

「そ、そうなんだ。たしかにほんものがあるはずなのさ。そん

なのが、まいばん動いているのかとおもうとね、ぼかあ、夜中に眠ねむれなくなっちゃうんだ。」

「ぱんっ。」

はら子が、両手をならした。

「よーし、ぶると君のなやみも、みんなのなやみも、いつぺんに解決かいけつするには、ほんものの「ゆうれい電車」をつきとめるしかないわよ。それには、まず、ぶると君の兄さんに聞いてみることにね。きょう、兄きはいるの？」

「ああ、きょうは予備校よびこうを休んで、うちにいるはずだよ。」

すぎやま

（杉山径「ゆうれい電車を見た！」）



「カキが、わらっている。」

花子は、そう思ってた木のえだに足をかけた。カキの実の皮がさけて、そこが黒くなり、ちようど、口をあけてわらっているように見えるからだ。鳥がつついたので、そうだったのか、霜<sup>しも</sup>かなにかのかげんでそうだったのか、わからない。そんなことはどうでもいい。あのわらっているカキの実が、あまいんだ。学校から帰って、カキの木にのぼって、もいで食べるのが花子のこのごろのたのしみだ。

きのうの雨で、カキの木はだはぬるぬるしていたが、木のぼりじやうずな花子には、たいして苦にはならない。去年、えだにつかまったら、それがおれて、どしんと落ちたことをふと思いだしたが、そんなこともへいちゃらだ。

「そら。」手をのばして、わらったカキの実をもいだ。大わらいをしているカキを見つけては、ズボンのポケットに入れる。どろぼうポケットといって、ふくろみたいに大きい。それが、左と右についているから、たいいていのものはまにあう。

大きいのを五つずつもいで、ポケットに入れた。「まだまだ入るのだが、まあ、このくらいにできようはやめとこう。あしたのおたのしみー」

花子は、カキのえだをつたわって、おもやの屋根にのりうつる。屋根がわらがわれるとしかられるので、ネコみたいにはってあがり、むな木の上にまたがった。

そうして、大きな口をして、わらっているカキの実にかぶりついた。花子の口も、なかなか大きい。食べながら下を見ると、家の前の道で、七つか八つの女の子が、花子のほうを見あげている。

女の子は、緑色とべに色の水玉もようの服をきていた。水玉のふちを黒でかこんでいる。だから、ちよつとステンド・グラスみたいな感じだ。

花子は、あまいしるをたのしみながら、女の子の服地のもようを見ていた。

カキの実を、二つ食べてしまい、三つめを手にしたとき、女の子は、まだ、そこをうごかないでいる。

「あの子、カキをほしいんだな。」と思った。見たこともない女の子だけれど、花子は、屋根の上から声をかけた。

「これ、落としてあげるから、うけなさいよ。」

女の子は、なんのへんじもない。聞こえないようでもある。そこで、花子は、もういちど大きな声でさげんだ。

「ほら、これ、落としてあげる。うまくうけなさいよ。」

そうして、右手でソフトボールのたまをなげるような、モーションをしてみせた。女の子は、べつに両手をあげて、うけとる

ようになかつこうもしない。  
「こわいんだな。あんな小さな女の子に、ここからなげたのじゃ、すこしむりかな。」  
花子は、またネコになつて、そつと屋根をはいおりて、カキの木をつたわり、そこからするすると地面におりてきたが、カキの実はうまくつぶれなかった。

(石森延男<sup>のぶお</sup>「カキ」)



正三と石を投げた少年とは、とうとう顔をつき合わせるところまできてしまった。

「おい。」

さきに声をかけたのは、相手の少年だ。

「いま、なんていった。」

すごい顔をしている。

正三は、はじめ自分と同じ年くらいと思ったが、近くで見ると、相手はどうも五年生か六年生くらいの大さだ。色が黒くて、とても意地の悪そうなのだった。

（これは、やっかいなことになったぞ。）

正三は、ほんとういうと、すこしこわくなってきた。けんかをやれば、むこうのほうが強いにきまつている。それに正三は、これまでけんかというものをしたことがないのだ。

（なぐられるかもしれないな。）

だが、正三はやせがまんをはった。

「石を投げるなといったんだ。」

「なに？」

相手の目がきらりと光った。

「なんだと。よけいなお世話だ。」

その声を聞いたとたん、正三の目には相手がきゆうにおそろしいおとなのように見えてきた。

（あぶない。早く逃げろ！）

正三の中で、そういう声が聞こえる。

そいつは、じりじりと正三に近づいて来た。正三はいまにもくるりとうしろを向いて走りだしたかったが、やつとがんばってそこに立つた。

「あれは、ぼくのひばりだ。」

正三は、自分でも思いがけないことをいったのである。

「なに？ おまえのひばりだど。」

「そうだ。あれは、ぼくが飼っているひばりの子だ。らんぼうなことはしないでくれたまえ。」

相手は、おどろいて正三の顔を見た。

「おまえのひばりだど？」

相手の少年は、あきれたようにいった。

「うん。あれは、ぼくのひばりなんだ。」

断固としてそういうと正三は、ゆっくりとしばふのほうを見て、どうやらひばりの子はそのあいだに麦畑にぶじに帰ったことをたしかめると、さっさと家のほうへ引き返した。

敵は正三のあとを追っかけて来るかと思ったが、「ちえつ。でたらめいってやがる。」といっただけで、向こうへ行ってしまった。

正三はほっとした。

（ああ、よかった。あぶないところだったな。）

それから、とっさの時に、どうしてあんなことをいいだしたのだろうかと思うと、なんだかおかしくなってきた。

ふしぎなもので、こちらがへんなことをいったものだから、いまにもなぐりそうに勢いこんでいた相手のほうでは、はぐらかされて手出しができなくなったのだ。

「ああ、愉快、愉快。」

正三はしだいに得意な気持ちになって、ひとりごとをいった。

「なつめは、学校の帰りにときどき、いじめっ子に会うといってるが、あいつがそうかもしれないな。一ぱつ、くらわしてやればよかったな。」

（庄野潤三「ひばりの子」）





誰だって失敗なんかしたくない。

失敗することははずかしいことだと思っている。だから、なるべくなら失敗しないように、細心の注意を払う。(中略)

失敗することは、そんなに悪いことなんだろうか。そんなにはずかしいことなんだろうか。

私のところにアルバイトにきてくれていた女の子は、とても優秀で、なにをしても完璧に近い仕事ぶりだった。

そんな彼女だから、たまには小さなミスでもして、注意されたりすると、さあたいへん、全然たいしたことでもないのに、ぼろぼろと涙を流し、その日は一日中落ちこんでいる。

これでは注意したほうもたまらない。「これ、まちがつてるんじゃない?」と言い、「あつ、そうか。いっけなーい」ですんじやう会話が、突然泣きだされ、あげくにしよんぼりされてしまったのはなにも言えなくなってしまう。

実際、おこられることを極端に恐れる人がいる。おこられると思っただけで心臓がとまりそうになったり、じんわりと涙がうかんできたり……。必要以上に反発する人もいる。そういう人たちは、心のどこかで、自分がおこられるようなことをするはずがない、おこられたりする自分はゆるせない、と思っているのではないだろうか。

私が出版社で働いていたころ、おこられない日は一日もなかった。作業がおそいといつてどなられ、センスがないといつてののしられ、ミスでもしようものなら、「バカヤロー」と大きな雷が落ちた。いちいち気にしていたり、落ちこんでいたりしたら、三日もつづかなかつただろうと思う。

もちろん、あまりおこられるので、自分はこの仕事にむいていないのではないかと、けつこう真剣に悩んだこともあったけれど、なににより、それでもこの仕事が好き、という気もちが優先した。それなら、おこられるにしても、おなじことでおこられないようにしましょう。そのための改善策を考えるしかない。

作業がおそいのは、手順が悪いせいではないか。センスが悪いといわれるのは、想像力がかけているからではないか。ミスが多いのは、あせりながらとりかかっているせいではないか……。

おこられるポイントを、ひとつずつ整理して考えていくと、案外挽回できるものだ。少しずつだけど、おこられる回数もへってくる。あげく、私のことをとなりつづけた雷オヤジから、こう言われた。

「おまえって、ほんとにおこりがいのあるやつだな。おまえみたいなのおこるのは、楽しくってしかたがない」

「どういうことですか!」

さすがにむつとなる。人の気も知らないで、楽しいとはなににごと

か。

「あのな。よくおぼえておけよ。人はおこられなくなったら終わりだ。おこられることは自分をのばすチャンスなんだ。だから、おこられなくなったら、自分が見はなされたか期待されていらないと思え」

彼はそう答えた。それから、私もだんだん年をかさねて、人に注意する立場になったとき、彼が言ったことの意味がよくわかった。こちらが注意して、すぐに泣いたり、落ちこんだり、言いわけばかりする人のことは、もう二度と注意なんてしたくないと思う。

それより、多少優秀じゃなくつても、おこられたことを逆手にとってがんばる人のほうに注目する。そしてそういう人のほうが、確実にのびるのだ。

なぜ失敗したのか。どうしておこられたのか。その理由を考え、それじゃあこうしてみようと思うからこそ、つぎにつながる。そうして成長していくのではないだろうか。

(倉橋耀子「くよくよしなないで、笑っちゃえ!」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

その夜も洗面所で歯ブラシを使っていたら、ガラス戸いちまい向この風呂場で、子どもたちが、喋っていた。

まず中学一年の兄貴が、少し大人っぽい口調ではじめる。

「うちのとうちゃんは、このごろ、ちよつと、おかしいと思わんか。」

「そうや、そうや。」

だいたいがイエス・マン風の小学四年の次男は調子がいい。

「とうちゃんは、自分で、子どものことが専門や、子どもの味方やと、いばつとるけど、とうちゃんのいう子どもとは、よその家の子どものことと違うか。」

「そやそや。ばくら、うちの子を、あまりかわいがってくれへんわ。」

「帰ってくるのが遅い、いうのが、第一まちがつとる。それに、よう外泊しよる。」

「日曜でも、あれは何や。仕事です原稿かきます、とか何とかいうとるけど、自分の部屋で、ぐうぐう眠つとるのやで。どこにも連れていつてくれへん。」

「つまり、とうちゃんのいうとる子どものなかには、ぼくらは、はいつとらん、いうわけや。」

やつらはなかなか手きびしい。

なるほど、わたしはあまり早く帰宅するとはいえないし、帰らない日も少なくないのである。

(中略)

そのときは、それで終わったのだが、やがてしばらくすると、わたしの部屋へ、そろつてやつてきたのである。というより、兄貴の方が、あまり乗り気でない次男をひきずって、いわゆる団体交渉にきたものとみえる。

「おとうちゃんに、聞くけどな。」

兄貴から、きりだしてきた。

「まい晩おそいのは、仕事や、というとるけど、何の仕事しとるのや。」

「まだ、わかつとらんな。とうちゃんはな、何十万、何百万という子どもたちのために、骨をおつて、りっぱな影絵やらアニ

メーションやらの製作をしとるのやぞ。」

おとなげないと思つたが、わたしも紋きり型に、胸を張つてみせた。もちろん、わたしが遅くなるというのは、こういうことだけではないのだが、勤めのことや研究室の仕事など説明してみても、はじまらない。彼ら向けの言い方をしよう。

「いいか。世のなかの子どもたちは、とうちゃんの仕事のおかげで、どんなに、たのしい目をしとるか、わからんのやぞ。」

だが中学一年ともなれば、こういうハッターじみたこけおどしには降参しない。

「何十万何百万のよその子どものために、ぼくらギセイになつてもええというのか。」

ときた。やはり焦点のあつた、つくべきところは、ちゃんとついているという感じである。しかし、ゆきがかり上、わたしも、ひきさがるわけにはいかない。

「ゼイタクをいうな。そんなとうちゃんと、同じ家で住んでいられるだけでも、ありがたい、名誉あることやと思つて、よろこべ！」

このへんは、いうまでもなく漫才のつもりなのだが、急に、これまで黙つていた次男が口を出した。

「そうやそうや。ぼく、おとうちゃんの言うのん、正しいことやと思う。」

わたしは、ちよつとドギモをぬかれたように、次男の顔をみた。次男は相当気弱な子どもで、さきほどの風呂場でのやりとりを、わたしに聞かれたことに、よほど負い目を感じているらしい。

そういう、しおらしさが、かわいそうになつて、

「弟のほうが、ずつと、ものわかりがええやないか。」

適当にほめてやると、兄貴はフン然と席をたつた。

「裏ぎりもんめ。おまえは、すぐ、とうちゃんに、ごまかされよる。話にならん。」

そして、どんどん二階の勉強部屋へ駆けあがつてしまった。そんな兄貴のようすをながめながら、次男は気のいい小さな笑いをみせた。

「こいつは、かわいいやつや。」

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

わたしは頭をなでてやりたいくらいだったけど、彼の作文を担当の先生に見せられて、あきれかえった。  
 ぼくのおとうちゃんは、おおげさで、にぎやかで、しりたがりやで、おこりんぼです。

こういう書きだしで、その一項ずつ実証するかのようにな、具体的な事実を、ぬけぬけと書いているのだ。

たとえば「おおげさ」という条は、こういう調子である。

影絵なんかするとき「これは日本一のスクリーンでやってんのやぞ」と、ものすごく、いばった顔つきで、いいます。京都会館でみると、きれいなあとと思うけど、ほんまに日本一やろかと思えます。

また、七度五分ほど熱がでると、「へんとうせんで、こえがでない」といって、大きなスズを、リンリン、リンリン、何べんもならします。

八度五分ほど、熱がでたら、「ユイ言じようを書く」いわはります。

ぼくは、びっくりして、心ぞうが、ドキドキしましたが、おかあちゃん、平気でごはんを食べています。

バカらしいから、このあとは引用しない。しかし、とんでもないところで闇討にあつたみたいなの、こころおだやかでない変な気持ちである。

しかも次男の担任の先生は、まじめくさって、ほめあげてくれるのである。

「さすが、おとうさんに似て、するどい観察をする子どもですよ。たすけてくれ。」

(中川正文「次男の観察」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



一九九一年の湾岸戦争では、原油が海にながされ、海で生きる動物たちがたくさん死にました。

また、空から落とされた爆弾で、ものすごい量の石油が燃えて、大気をよぎしました。

「人間たちは、どこまでやるつもりなの？ まいったなあ。」

さすがの自然も、最近の人類のめちやくちやぶりにはこまりはてていたにちがいありません。

「もう、がまんできないぞ！」

自然が、怒ったのだと思います。

「ここでやめないと、もつとひどいことがおこるよ。」

それとも、自然からの警告でしょうか。

地球規模の温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨は、怒った自然の逆襲かもしれません。

自然がいかにだいじかは、ぼくがおとなになってから気づいたことです。子どものころは、おとなたちが、「花がきれい」とか「空がきれい」などといったものを聞いても、そのよさがよくわかりませんでした。子どものぼくには、おもちゃで遊んだり、お菓子を食べた

り、友達と遊んだりすることが楽しかったので、自然のことはぜんぜん考えていなかったのです。

でも、年をかさねておとなになるにつれ、自然のことが気になるようになりしました。

「春かあ。そろそろサクラがさく季節だなあ。」

季節によって移りかわる景色を見ると、「いいなあ」と思うようになります。

ぼくが自然に興味をもつようになったのは、仕事も大きく関係していると思います。

お天気は、自然現象そのものです。ぼかぼかとあたたくておだやかな春、太陽がかと照つて暑い夏、長雨がしとしとふる秋、北風が吹いて寒い夜……。天気解説をしていると、季節のうつりかわりがとてもよくわかります。

季節のうつりかわりは、とても不思議できれいです。気持ちをほ

つとさせてくれます。また、お天気の仕組みがわかってくると、ぼくたちにとって、空がともだじいなものだということがわかってきました。

「自然の仕組みはすごいな。スケールが大きいな。」

「きれいな自然をこれ以上、こわしちゃいけないな。」

いつしか、そんなふうになんか思うようになりました。

みなさんは、自然について、どんなふうに考えていますか。もしかすると。子どものころのぼくとおなじように、あまり興味がないかも

しれません。よくわかります。ファミコンとかサッカーとか、おもしろいことがたくさんあるでしょうから。

でも、きつといつか、自然を「きれい」と感じたり、「自然はたい

せつにしなければ」と思ったりするときにがくと思えます。そのとき、空や空気がよれていて、緑がなかったら、とても悲しいと思

います。みなさんに、そんな思いはさせたくありません。

「それじゃあ、どうしたらいいんだろ。」

いろいろ、考えてみました。

社会がここまで発展してしまうと、自然をまつたくいじらないとい

うのはむりです。でも、いじらなくてもいい自然もたくさんあるはず

です。そういうところは、開発してはいけない。これからの人類に

は、「節度」というものがだいじなのです。

ぼくたちおとなが、みんなの世代のためにできることがあるとすれ

ば、たぶん、そういうことです。

そして、だまつていては何もかわりません。

「海に人工的に海水浴場をつくるのはしかたがないけれど、自然の海

岸線をこわしてどんどん大きなホテルを建てる必要が、ほんとうにあ

るのでしょうか。」

「ゴルフ場はもうたくさんあります。これ以上は、つくらないくだ

さい。」

みんなが声をだして、きちんといっていくこともだいじだと思います。

（森田正光「森田さんのおもしろ天気予報」）





住居の形態も、近所づきあいも、教育も、社会のしくみが、むかしとくらべて、ひととひとがふれあつて生きにくくなっているのは事実だ。だからといって、個室にこもってしまったら、ますます友だちなんかできるはずがない。ひとときあうということは、出会うことから始まる。実際に会つて、ああこのひとが好きだとか、きらいだとか思うわけだ。

自分だけの個室にいれば、だれも文句をいわないし、いやな人間もないし、居心地はいいかもしれない。でも、それは、あぶないことやいやなことをさけるシェルターにこもってしまうようなものだ。

無菌培養でも、おとなにはなれるだろうが、ときには外部の菌にまみれて、免疫をつけていくことも大切だ。それが、人間としてのほんとうの勉強だ。

(中略)

友だちができない、という人生相談には、ぼくは、「それは、キミ自身が悪いんだ」

そう答えてきた。自分で、カラをこしらえているのが悪い。カラをつくつて、自分の世界にとじこもつて、心の個室までつくつてはいけないんだ。自分の世界だけでなく、他人のことに興味をもたないからね。

ひととどうまく接していくには、話術も大切だ。ひととひととのふれあいは、話すことから始まるのだから。まだ、きみたちは若いから、話術がじゅうぶんでないかもしれないが、今のうちに、どんな恥をかきながら、それをみがいていけばいい。でも、個室で、パソコンを相手にしていたら話術などみがけるはずないよ。

もちろん仲間とつるんで行動して、一見、友だちがいつぱいいて楽しそうに見える子どもたちもいる。しかし、ほんとうに心の通じあいたいなものはあるのだろうか。

最近、カラオケボックスが人気だが、若者の様子をのぞくと、だれかがうたっているかたわらで、ほかのひとは、めいめいにカラオケの本をめくつて、自分のうたう曲をもくもくときがしている。だれもひとの歌をきいてもいなければ、まったく話をしてもいない。

会話なんて、存在していないようだ。あれでは、べつに友だちでなくとも、知らないひとといっしょだつて同じことだ。

ぼくの目には、みんな同じグループのなかにいながら、それぞれが目に見えない個室にとじこもっているように見えてしまう。あんなことをやっていて、楽しいんだろうか。あまり話しなれていないから、そのほうが、きつと楽なのだろう。デートのときも、あんな調子なのだろうか。なんだかとてもさびしい気がする。

若いきみたちには、どんないろいろなひとと会つてほしい。たくさん友だちをつくつて、人間の勉強をしつかりしてほしい。将来、社会に出たときに、映画の「モダン・タイムス」みたいに、単なる機械の歯車のひとつとして、もくもくとはたらくしかない、ということにならないためにも。

歯車になりきれず、人間性の欠如した社会で落ちこぼれたチャップリン扮する労働者は、同じように社会からはみだしてしまった自分の彼女に向かって、

「Buck up never say die, We'll get along」

「元氣を出すんだ、死ぬなんていつちやだめ。うまくやっていけるさ」

そういつてはげます。

そう、人間性をもったひとは、きつとどうまくやっていけるのだ。だから、ひととの出会いを大切にして、自分のことをどんどん話し、相手の話にも耳をかたむけることだ。そのためには、ひとに好かれるような素敵な人間でいることもわすれないでほしい。

ぼくは、子どものころから、いつぱいあそんで、いっしょうけんめいに仕事をして、大勢の友だちと出会った。子どものときに、友だちとあそんだから、今も、たくさんさんの出会いがあるのだと思う。無理をして体をこわしてしまったこともある。コツコツお金をためていたら、今ごろ、大きなビルがたつていたかもしれない、と思うこともある。

それでも、ぼくは、お金がふえるより友だちがふえるほうがいい。そのほうが人生は楽しい。だから、これでいいのだ。

(赤塚不二夫「学校よりも人間の勉強がだいじなのだ」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「ゆたかみーつけっ。真理子みーつけっ」

ひろしがさけび、みんないつせいに走りだした。駐車場をとびだすと空気がうす青く、もう夕方のはじまっている。わーっという歓声

があがり、ひろしがカンをけつて、今度はゆたかが鬼になる。

カポーン。あちこちへこんだあきカンが、まのぬけた音をたててもう一度けられ、鬼をのこしてみんなかけだした。時夫は、T字路まで走って思い出したように立ちどまり、くるつとうしろをふりむいた。

「やっばり」

やっばり、だった。青屋根のたてものの窓から、きょうもおばあさんが見えている。青屋根のたてものは、そこからへい一つへだてたキャベツ畑のむこうにあった。

「オレ、ぬける」

ぽつんと言って、時夫はへいによじのぼると、ひよいとどびおりた。ほこつと土のにおいがする。

「おい。どこ行くんだ。養老院だぞ」

背中ごしにゆたかの声がした。その青屋根には、ボケてしまった老人がたくさんいるので、子供たちはこわがってちかよらないのだ。若い女の人の血をすって生きているおばあさんがいるとか、子供の肉でつくったハンバーグが大好物のおじいさんがいるとか、いろんなうわさがあった。

この養老院では週に一度、老人たちに看護婦さんが何人かつきそつて、散歩に行くことになっていた。時夫とおばあさんが出会ったのも、そんな散歩の時だった。もう一カ月ほど前になるだろうか。川ぞいの道でお父さんとキャッチボールをしている時夫を、おばあさんは土手からながめていた。

「行くぞ、時夫」

お父さんがそう言ったとき、やおら立ち上がったおばあさんはとつぜん、大きな声でこう言ったのだ。

「あんた、トキオ、いうんか。わたしはトキ、いうんじやよ」

びっくりするほどしつかりした足どりで、つかつかとちかづいてきたおばあさんは背がひくく、日にやけて、やせていた。

「友達に、なつてくれるかの」

おばあさんは破顔一笑、そう言った。

それから毎日、おばあさんは窓から時夫を見つめていたのだ。あそびに来てほしいのかもしれない、時夫は何度もそう思ったが、その勇氣はなかった。キャベツ畑のむこうの青屋根といえ、子供たちにとって、おばけ屋敷もおんなじだったのだ。

けれども、もう決心した。時夫はぐつと胸をはり、キャベツ畑のまん中の細い小道を、どんどん歩いていく。

「もどつてこいよ。鬼ばあがいるぞ。」

みんなの声が、うしろからきこえていた。

小さな玄関に入り、病院のような待ち合い室をぬけると階段があり、窓を目印にいくと、おばあさんの部屋はすぐにわかった。色あせた畳の上に冷蔵庫とテレビがおいである。時夫は帽子をとつておじぎをした。

「待つとつたよ。これはルームメイトのゆりこさんに、げんさんに、ひさしさん。これは私の友達のとキオ」

おばあさんはじゅんぐりに紹介し、冷蔵庫からジュースをだしてくれた。おばあさんが「ルームメイト」という言葉を使つたのが、なんとなくおかしくて、時夫は心の中でくすくす笑い、緊張が、するつとほぐれた。

「毎日毎日、カンけりしとつたなあ」

おばあさんが言つて、

「トキさんはまた、それを毎日毎日、見とつたなあ」

ひさしさんが言つた。ひさしさんは白髪頭を短く刈つた、色白のおじいさんだ。

「見ていると、私もいつしよに遊んでいるような気がしおつてね」  
おばあさんははずかしそうに笑うのだった。

ゆりこさんと呼ばれたおばあさんは長い髪を左がわでおさげに編んで、白い浴衣を着ていた。部屋のすみの赤い座布団の上にすわって、一心にお手玉している。時夫の視線に気がつくど、しずかに、ふわつと笑った。小さな、白い、あどけない顔だった。

「アイスクリームがあるからおあがり。あんたのために買うといったに」

おばあさんが言った。紙のカップに入ったバニラアイスはかちかちにかたまつて、冷蔵庫のにおいがついていていた。ずいぶん前から買ってたんだな。時夫はそう思いながら、さつきから窓のそばでたばこをすっている、げんさんというおじいさんの横顔をちらりと見た。

むつりして、少しこわい横顔だった。

「テレビ、みようか。そろそろ大乃国がでるころだな」

ひさしさんが言った。

「大乃国？ だめだめすもうは桝田山だよ」

「おつ、しぶ好みだな」

おすもう好きのひさしさんと、やつぱりおすもう好きの時夫とはすっかり意気投合し、ハンバーグなんてうそばっかり、と、時夫は心の中でつぶやいた。

（江國香織「つめたいよるに」）



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



「おかあさん。私、みかんをいただきたいわ。そんなに、たくさんでなくてもいいのよ。」

「でも、おとうさんが、どうおつしやるか……」

かの子は、友だちのだれよりも、自分は幸福だと思っています。

例えば、町のお店では、今ごろとても手に入れないようなみかんも、かの子は、病気の友だちに、持って行ってあげることができるのです。

そこでふと、かの子は思いました。

「あたし、みかんをどのくらい、おとうさんにおねだりしようかしら？」

その時、かたことと、おとうさんのくつ音――。

「おとうさん、お帰んなさい。」

かの子は、茶の間をつききつて、玄関にむかえ出ました。

けれども、どうしたのか、おとうさんはいつもとちがつて、おこつたような顔つきをしています。

おかあさんも、台所から出てきましたが、すぐ、おとうさんの顔色に気がついて、

「気分でも、悪いんじゃないやありません。」

「なーに。そんなことはないよ。」

おとうさんは、自分でやつと自分のきげんが悪いのに気がついたように、きまり悪そうに笑いました。

やがて、着がえをしたおとうさんは、茶の間の食卓の前にすわつて、「ほう、おいしそうだな。」

おとうさんは、手作りの野菜サラダが、何よりも好物だったのです。

食卓には、野菜サラダのほかに、さかなのフライも出ていました。おとうさんは、それをおいしそうに食べます。

かの子は、おとうさんは、病気でなかったのだと安心しました。そして、「ああ、おいしかった。」と、おとうさんがはしを置くのを見て、思い切つて言いました。

「おとうさん。私に、みかんをくださいな。たくさんでなくていいの。」

すると、おかあさんも、

「少して結構ですから、やってくださいません。」

ところが、それを聞くとすぐに、お父さんの顔色は、また、

たちまちくもつてしまいました。

かの子は、びっくりしました。

おかあさんも、はつとして、

「決して、無理にとは申しませんが……」と、半ばわびるように言います。

というのは、おかあさんは、おとうさんが、みかんのことでおこり出したのだと思つたからでした。

そのみかんというのは、この、県立の農事試験場内にある温室みかんのことで、場長であるおとうさんには、それは、いつでも自由にすることができのです。

けれども、おとうさんは、みかんに限らず、試験場のものを、家に持つてくることを、絶対に許しませんでした。もし食べてみたいなら、農場の人たちといつしよに働いて、試食をしなさいと言うのです。

おかあさんも、おとうさんの言うのが、正しいのをよく知っていました。でも、今日は、かの子の友だちのために、特別、たのんでみたのです。

でも、おとうさんの顔色からみると、どうやら、それもだめなようです。

かの子は、さびしいような、悲しいような気持ちで、じつと、庭を見ました。その庭の向こうに、水色の屋根を見せているのが温室で、そこには、二十株のみかんの木と、十二株の試験栽培の水稲が大事に守られています。今朝も、かの子は、その前を通る時、まだたくさんのみかんの実が、まるで宝石のように、美しくなっているのを見ました。

でも、それを一つもいただけないとなると、なんだか、おとうさんがうらめしくなります。作るのに、たいそう費用のかかる温室みかんは、当然、高く売らなければならぬでしょう。

でも、たつた一つぐらい、おとうさんに優しい思いやりの心があれば、買ってくださることもできるのではないでしょうか。

「かの子ちゃん――」と、不意に、おとうさんが声をかけました。

かの子が、だまって、おとうさんに目を移しますと、おとうさんは、まじまじとかの子をながめて、

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34



「病気をしているのは、どの子なの。」

「あたしと、ならんでいる子よ。」

「ほう。重いのかい。その子の病気は？」

「もう十日ねているの。熱があつて、なんにもおいしくないんですつて。」

「それで、みかんが食べたいと言うんだね。でも、今ごろ、みかんなんかとても食べられないだろうよ。町には売っていないだろうし、もし売っているとしても、ずいぶん高いだろうからね。——困ったね。今朝ならよかつたのに。」

「おや、それじゃ、もう温室にはないんですか。」

おかあさんは、意外だというように、おとうさんを見つめました。おとうさんは、軽くうなずいて、

「ないんだよ。」

「市場へでも、お出しになったんですか。」

「ばかを言っちゃいかん。市場へ売りに出すくらいなら、苦労して、

今ごろまで枝につけておくものか。あれは、特別の事情の人に——

例えば、重い病気で、しかも、びんぼうで、食べたいみかんも食べられない——そういった人たちに、一つずつでもわけてやろうと思つて、大事に残しておいたんだ。それなのに、今日ちよつとしたすきに、みんなやられてしまった。」

「まあ、だれですの、そんないたずらをするのは。」

さすがに、おかあさんの顔つきも、腹をたてたように険しくなりました。

(住井すゑ「わたしの少年少女物語」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



やわらかい毛皮とボタンのような目、エナメルのような鼻。コアラは、まったくだれをもひきつける魅力をもっています。だいてはおずりしたい、と思わない人はいないでしょう。(中略)

コアラという名まえは、「のまない」という意味の原住民のよび名からきていますが、じつさい、コアラは必要とする水分のすべてを、ユーカリの葉からとっているのです。

おさないうちにつかまえられるコアラは、おとなしくて人なつこいペットにそだつものです。じつさいには、のんきでお人よしという

より、無気力というほうがあたっているかもしれません。コアラは、ぶしように動きもにぶく、人間をおそれません。木にだきついている

一頭のコアラを懐中電燈でてらしても、他の動物たちのように、安全な場所へにげようとあわてることもなく、むしろ、ぼんやりとながめかえすほどののです。攻撃しやすいことと、その毛皮に人氣がある

ために、今世紀はじめの数年間に、たいへんな数のコアラが殺されました。一九二〇年から一九二一年のあいだに、二十万頭以上のコアラ

の皮が、オーストラリアの毛皮市場にあらわれ、三年後には、二百万頭をこえる毛皮が輸出されました。

コアラはもう、西部オーストラリアでは見られなくなりました。いまでは、ニュー・サウス・ウェールズ、クイーンズランド、それにビ

クトリアといった東部や南部の州で、保護される立場になりました。とくべつの保護区でそだてられ、ときには、きゆうに数がへつたり、

まるでいなくなつた地域にふたたびつれてこられてきたのです。でも、コアラの数がふえつつあることは、こんな道路標識があらわれ

るようになったことでわかります。コアラが道路を横ぎつたりするのは、他の木にうつりたいときだけです。コアラは、一生を木の上ですごします。おもな食物はあるかぎ

られた種類のユーカリの生長しきつた葉です。コアラは、自然界でいちばんたべものにうるさい動物なのです。ある動物園の飼育係は、コ

アラに食事をさせるいちばんいい方法は、いろいろなユーカリの葉を

バイキング方式であたえて、自分の好みのものを見つけたさせること

だ、といっています。親指が他の指とむかいあわせに

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

なつた指と、するどいつめをもっているのも、コアラは木の幹や枝の上で、すばやく動くことができます。また、繊維の多い葉をしめらせて消化しやすくするための袋を、ほおの内がわにもっています。かれらは、夜行動し、昼は枝のあいだでうつらうつらして過ごし、夜になると、好物の葉を１キロもたべて夜が明けるまでをすごすのです。カンガルーの赤んぼうとおなじように、コアラの子どもも、うまれとすぐ、目が見えないままで、母親の毛皮のなかを行進しなければなりません。最初の六か月間をすごす育児のうを見つめるためです。育児のうは、うしろむきになっています。これは、木のぼりをする動物にとつて、あまりつごうのよいことではありません。六か月間、袋の中で生活したあとで、コアラの子どもは、おかあさんの肩にうつります。三さいか四さいでおとなになり、なかには二十さいまでなが生きしたものもいます。成長しきつたコアラの体重は、約十キロです。

オーストラリアの野生生物管理官が、コアラたちを移動させる目的でわなをかけるときには、さきのほうにくくりむすびのついた、長いさおをつかいます。不安にみちた移動であるはずなのに、コアラたちは、おどろくほどおちついて行動をする、と管理官は報告しています。しかし、新しいすみかとなるはずの木の下のについても、しつしつとおいあげられないと、木の幹にのぼろうとしないのです。

コアラをペットとしてかつたことのある人は、コアラが、鏡にとくべつの興味をしめすようだ、といっています。鏡にうつつた自分の毛むくじやらの姿を、ながい時間、あきるようすもなくじつと見つめているのだそうです。それは、まるで、コアラが人をひきつける魅力をもつた動物であることを知っているように見えたし、どうやらそれを自分でもあじわっているようだった、というのです。

(ドナルド・デイル・ジャクソン 岩倉徳光「世界の野生生物」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

人間が生きていくために、どうしても欠かせないものを四つあげな  
さい、と言われたら、みなさんは何をあげますか。

まず、空気がありますね。そして水、食物、ここまでではほとんどの  
人が考えることだと思います。

さて、四つ目は？

サルの研究で有名なM・スワンソンさんという生物学者は、人間が  
生きていくために不可欠な四番目の要素として、コミュニケーション  
をあげました。

彼女——M・スワンソンさんは女性です——によりまして、

「人間は、どんな人でも、コミュニケーションのできる相手を持たな  
いとき、病気になるって死んでいく」  
ということなんです。

私は、これまで、コミュニケーションということばをくり返し  
使ってきましたが、その意味は、心の通じ合い、ということでした。

しかし、コミュニケーションの考え方をもちとよく言い表してい  
る、私の大好きなことばがあります。

それは、このM・スワンソンさんが言ったことなのですが、  
「コミュニケーションとは、人間の心の温かさの交換である」  
ということばです。

素晴らしいことばだと思います。みなさんにも、ぜひ覚えてい  
ただきたいと思っています。

このことばについて説明することは何もありませんが、一つだけ注  
意してもらいたいのが、「交換」ということばです。これは、ことば  
のキャッチボールがそうであつたように、コミュニケーションとい  
うのは、一方通行ではなく、両面通行であるということなんです。つまり、  
心の温かさの交換というのは、思いやりのやりとりということになり  
ます。

M・スワンソンさんが言っている通り、私たち人間は、おたがい  
に人間的な心の温かさを感じ合えるような人が、この世界に一人もい  
なければ、生きていくことはできません。たとえ、行き来をしたり、  
手紙をやりとりしたり、一緒に住んだりしなくても、心の温かさを感じ  
合える人が必要なのです。

もし、家族も、親戚も、友だちも、先生もいなかったとしたら、ど  
うなるでしょう。話し相手も、遊び相手もいなかったら、どうなるこ  
とでしょう。

自分が一人ぼっちになり、話し相手が一人もいなかったときのこ  
とを想像してごらん下さい。ロビンソン・クルーソーのように、南海  
の孤島にたった一人ぼっちで残されたときのことを考えてみてくださ  
い。たとえ、食べることが保証されていたとしても、ずっとその  
状態が続いたら、私たちはふつうの生活を送っていくことができな  
いのではないのでしょうか。  
M・スワンソンさんはサルの研究をしています。サルにとって  
も、コミュニケーションは非常に大切なことなんです。

彼女の実験によりまして、群れをなして生活をしているサルの中か  
ら一匹だけ隔離すると、一週間もすると、サルの行動が目に見えて  
変化してくるそうです。仲間たちとのコミュニケーションが断ち切ら  
れたことによつて、サルの行動に狂いが生じてくるのです。

いろいろな例が報告されていますが、一つだけ紹介してみます。  
サルは全身毛で被われていますが、その毛を一本ずつ一生懸命に  
抜いていくのだそうです。寝ているときと食べているとき以外は、ほ  
んど毛を抜き続けているので、しまいは、抜いたところが赤むけ  
になり、気持ち悪くて見ていられないくらいになるそうです。ところ  
が、このサルを元の仲間のところに帰してやると、この毛抜き作業が  
びたりと止み、ふつうの状態に戻るそうです。

私たち人間も、だれ一人としてコミュニケーションのできる相手  
がいなくなつてしまつたら、精神にどのような狂いが生じ、どのよう  
な行動をとることになるのか、考えただけでも恐ろしい気がします。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

転校したときや見知らぬ土地で一人暮らしを始めたときに感じる孤独感<sup>こどく</sup>は、コミュニケーションの大切さをよく物語っています。そんなとき、私たちは、友だちが欲しいなあ、話し相手が欲しいなあ、と思います。つまり、コミュニケーションのできる相手を求めているわけです。

そして、実際にコミュニケーションをすることによって、新たな人間関係をつくり出し、新しい環境の中で生活していくことができるようになります。

人間というものは、コミュニケーションのできる相手が多ければ多いほど、楽しく充実した生活を送ることができます。そして、その積み重ねが、豊かな実りある人生につながっていきます。そうした人生が送れるように、ことばのキャッチボールがあるのです。

（斎藤美津子「話しことばのひみつ」）



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67





美しい景色をみて思わず、「きれいな」と口にでて、たのしい思いになる、それでも十分とも思いますが、そのたのしい思いにさせてくれるものの姿を、たしかめてみましょう。

美しいものと、美しくないものと、わたくしは自分の部屋を見まわして、よりわけてみました。

机の上のペン皿にあるえんぴつ、何本かのえんぴつの中で美しく目にうつるのは、けずりたてのえんぴつです。シンがまるくなつたり、折れたままのは美しいとは思えません。

お皿に盛ったバナナは、あざやかな黄の色をしていて美しい。でも実をたべてしまった皮は、皮になつた瞬間に、もう美しいとは思えませんし、色もまたたちまち黒ずんできたなくなつてしまします。

けずりたてのえんぴつが美しく目にうつるのは、「どうぞ、いつでもすぐに使えますよ。」と、すぐに役にたつ姿を見せてくれているからでしょう。

バナナの皮も、中に実をつつんでいるという、使命をもっているときは美しいのですが、その使命が終わつて皮だけになつた瞬間に美しくなくなります。

こうしたことを思うと、人に心よい感動をあたえる美しさとは、そのものが役にたつという姿を見せているところにあるのではないかなと思われま。

花が美しい、木々が美しいというのは、その命の美しさを感じるところにあります。命とは活動することであつて、つまり、役目を果たしている姿です。花も木も、せいっぱいに生き、そして自分たちの子孫を継続させるために、花を咲かせ、実をならし、その命を充実させて、活動しているのです。

わたくしたちは働く人を美しいと見ます。どんなにどんこんでも、汗みどろでも、働く姿は美しい。どんこんも、汗も、働く姿の美しさを引きたてます。これは、働くという行為が、活動そのものである

り、役だつ使命をはたすことであり、汗もどんこんもまた、そのためにあるからです。

でも、働くことをやめて、食卓にむかつたときの、汗みどろ、

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

どんこんこは、きたない、もう美しくは目にうつりません。このときの、どんこんこや汗は、労働という中味をとつてしまったあとの残りもの、バナナの皮みたいな存在になつてしまったからでしょう。食事をするという行為に、どんこんこは不要です。そこで、きれいにさっぱりと洗いおとさなければなりません。

ですから、同じものでも、そのものが、そのものとして役にたない場所にあるときは、美しく目にうつりません。

髪の毛は、髪にあるから美しい。ぬけおちた髪の毛が、食物の中にもはいつていたら、とてもゆううつです。

ショーウィンドーの商品がみな美しく見えるのは、「このとおり、役にたちますよ」と、マネキンに着せてみせたりして、たのしく、わかりやすく飾られてあるからでしょう。

わたくしたちのおしゃれや、動作、マナーなども、その場にふさわしく、役にたつかたちであるとき、美しく見えるのです。

急ぐときは、きびきびした動作が美しく、人にものをたずねるときは、その人に教わるという気持ちであらわすのに必要な謙虚な動作、教えるときは相手によくわかるようにする動作が、気持ちよく美しくうつります。

ここでひとこと、気づいたことをいいそえますと、必要と実用とは少しちがいます。

たとえば道を教わるとき、わたくしたちは、「すみませんが」ということばをそえますが、実用という面からいうと、このことばはなくてもよいわけです。「東京駅はどっちですか?」といえ、用はたせます。でも、それではぶつきらばうです。「すみませんが」といいそえることで、心のあたたかみが伝わります。「どうぞお茶をお飲みください」のときの「どうぞ」も同じで、こうしたやさしさがあつて、ことばも、動作も美しくなります。

「必要」と「実用」とを、どうぞ、まちがえないでください。

わたくしたちが生きてゆく上では、実用的な衣・食・住のほかに、遊ぶことも、たのしむことも、安らぐことも必要です。そうした精神的に必要なものとして、やさしさや美がつくりだされています。

(高田敏子「詩の世界」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

# 読解問題 1月4週分

問1 読解マラソン集3番「正三と石を投げた少年とは」の長文を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 二人が接近したとき、最初に「おい」と呼びかけたのは、正三のほうである。  
B 相手の子<sup>こ</sup>の投げた石は、ひばりの子に命中し、瀕死<sup>ひんし</sup>のけがを負わせた。  
1 A○ B○      2 A○ B×      3 A× B○      4 A× B×

問2 読解マラソン集3番「正三と石を投げた少年とは」の長文を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 相手は自分より年上<sup>としより</sup>のようだ。  
B 相手はひばりの子ばかりでなく、正三にも石を投げてきた。  
1 A○ B○      2 A○ B×      3 A× B○      4 A× B×

問3 読解マラソン集3番「正三と石を投げた少年とは」の長文を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 正三は、何でも自分のものにしないと気がすまない、自己中心的な性格で、いつもけんかばかりしている。  
B 正三は、自分より強<sup>つよ</sup>そうな相手にはっきりと意見が言えたのでうれしかった。  
1 A○ B○      2 A○ B×      3 A× B○      4 A× B×

問4 読解マラソン集3番「正三と石を投げた少年とは」の長文を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 相手は、自分もひばりの子を飼いたいと思っていた。  
B 正三は、自分のひばりの子である、と最初から相手に言おうと決めていた。  
1 A○ B○      2 A○ B×      3 A× B○      4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「正三と石を投げた少年とは」の長文を読んで、次の問いに答えなさい。  
「やせがまん」をはった正三の目<sup>め</sup>に、相手はどのようにうつりましたか？

- 正しいものを一つ選びなさい。  
1 おそろしいおとな  
2 5年生か6年生  
3 同級生

問6 読解マラソン集4番「誰だって失敗なんか」の長文を読んで、次の問いに答えなさい。

- 本文の内容に合うものはどれでしょう。一つ選んで番号で答えなさい。  
1 とても優秀なアルバイトの子は、全く失敗をしなかった。  
2 とても優秀なアルバイトの子は、小さなミスでも指摘されると、一日中落ち込んでいた。  
3 作者は、アルバイトをやとうのは好きではない。

問7 読解マラソン集4番「誰だって失敗なんか」の長文を読んで、次の問いに答えなさい。

- 失敗すると、人間はどのようになるでしょう。一つ選んで番号で答えなさい。  
1 人やものに当たる。  
2 はげしく落ち込んだり、気にしないふりをする。  
3 徹底的に原因を追及する。

問8 読解マラソン集4番「誰だって失敗なんか」の長文を読んで、次の問いに答えなさい。

- 作者に 雷 オヤジの上司が「おまえをおこるのは楽しくってしかたがない」と言った理由は何でしょう。  
一つ選んで番号で答えなさい。  
1 作者がおこられたことを逆手にとって、がんばる人間だから。  
2 すぐにくよくよするので、いじめたくなるから。  
3 あまり優秀でなく、ふざけているから。

# 読解問題 2月4週分

問1 読解マラソン集5番「その夜も洗面所で」を読んで次の問題に答えましょう。  
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A この兄弟は、「どこへも連れていってくれへんとうちゃん」に不満を持っている。  
B 「わたし」は、風呂場での子供たちのやりとりを聞いて、自分のことを深く反省した。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「その夜も洗面所で」を読んで次の問題に答えましょう。  
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 次男は、気が弱いのでいつも学校で損をしている。  
B 次男は、父親を心から誇りに思っている。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「ビルや道路」を読んで次の問題に答えましょう。  
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ぼくは、子どものころは自然のことを考えていなかったが、大人になってから気にかかるようになった。  
B ぼくは、子どものころから「花がきれい」「空がきれい」などというときのよさがわかっていた。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「ビルや道路」を読んで次の問題に答えましょう。  
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 社会が発展しても、自然をまったくいじらないで暮らしていくことはできる。  
B おとなが、子どもたちの世代のためにできることは、環境のための教育をすることだ。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「住居の形態も」を読んで次の問題に答えましょう。  
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 人間のつきあいは、まず出会いから始まる。  
B ひとつうまく接していくには、話術ではなく心が大切だ。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「住居の形態も」を読んで次の問題に答えましょう。  
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A チャップリンは、映画「モダン・タイムス」の中で、歯車になりきれない労働者を描いた。  
B 自分のことはあまり話さず、相手の話に耳を傾けてあげることが大切だ。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「ゆたかみ一つけっ」を読んで次の問題に答えましょう。  
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 時夫は、へいによじのぼると、養老院の庭から抜け出した。  
B 「破顔一笑」とは、歯のなくなった顔で笑うことである。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「ゆたかみ一つけっ」を読んで次の問題に答えましょう。  
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A バニラアイスがかたまって冷蔵庫のにおいがついていたようすから、おばあさんがずいぶん前から時夫が来るのを待っていたことがわかる。  
B 「ハンバーグなんてうそばっかり」というつぶやきの中に、時夫のがっかりした気持ちが感じられる。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 3月4週分

問1 読解マラソン集9番「おかあさん。私」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■お父さんは、いつもと違っておこった顔で帰ってきた。  
1 ○ 2 ×

問2 読解マラソン集9番「おかあさん。私」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■かの子が無理なお願いをしたので、お父さんの機嫌は悪くなった。  
1 ○ 2 ×

問3 読解マラソン集10番「やわらかい毛皮と」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■コアラは、食べ物を選ぶことをしないので、ユーカリの葉ばかり食べる。  
1 ○ 2 ×

問4 読解マラソン集10番「やわらかい毛皮と」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■コアラは移動する時にも、人間をおそれない。  
1 ○ 2 ×

問5 読解マラソン集11番「人間が生きていくために」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■コミュニケーションをおこなうには、直接顔を合わせる必要がある。  
1 ○ 2 ×

問6 読解マラソン集11番「人間が生きていくために」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■コミュニケーションをとれる相手がいなくても、おもちゃがあれば楽しく生きていける。  
1 ○ 2 ×

問7 読解マラソン集12番「わたくしたちは、『美しい』」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■働く人の姿は、どろんこでも美しく見える。  
1 ○ 2 ×

問8 読解マラソン集12番「わたくしたちは、『美しい』」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■「すみませんが」や「どうぞ」とつけるのは、実用的だからである。  
1 ○ 2 ×

1～3月

|                                                 |                                                 |                                                 |
|-------------------------------------------------|-------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| 小1<br>コード： nane    パ<br>ス： <input type="text"/> | 小2<br>コード： nane    パ<br>ス： <input type="text"/> | 小3<br>コード： nane    パ<br>ス： <input type="text"/> |
| 小4<br>コード： nane    パ<br>ス： <input type="text"/> | 小5<br>コード： nane    パ<br>ス： <input type="text"/> | 小6<br>コード： nane    パ<br>ス： <input type="text"/> |
| 中1<br>コード： nane    パ<br>ス： <input type="text"/> | 中2<br>コード： nane    パ<br>ス： <input type="text"/> | 中3<br>コード： nane    パ<br>ス： <input type="text"/> |
| 高1<br>コード： nane    パ<br>ス： <input type="text"/> | 高2<br>コード： nane    パ<br>ス： <input type="text"/> | 高3<br>コード： nane    パ<br>ス： <input type="text"/> |